

レイチェル・カーソンを語り継ぐ 「未来へのバトン」

原 強（はら・つよし）
レイチェル・カーソン日本協会 関西フォーラム代表

気候変動をはじめ、地球環境問題は「待ったなし」の状況である。消費者一人ひとりのライフスタイルと社会経済システムの転換が急がれる——。レイチェル・カーソンが世に問うた『沈黙の春』が上梓されて60年。「環境問題の古典」といわれる同書は今なお世界中で読み継がれる。持続可能な社会をめざすために、同書から何を学び、どのような行動が求められているのか。

現代に生きる古典として

『沈黙の春』は20世紀を代表する本として広く読まれてきました。そして、いまでは「環境問題の古典」ともいわれるほどです。

著者はアメリカの海洋生物学者レイチェル・カーソン。彼女は1907年5月27日、ペンシルベニア州スプリングデールで生まれました。『われらをめぐる海』など、海にちなんだベストセラー作品を書いたことから、彼女は「海の伝記作家」とよばれていました。もしも『沈黙の春』を書かなければ、彼女はひきつづき海と海に生きる小さな生き物たちの世界を書き続けたのかもしれない。しかし、彼女は『沈黙の春』を書かなければならなかったのです。

『沈黙の春』は、DDTをはじめと

する農薬・殺虫剤など化学物質がとめどなく使用されたならば自然の生態系はどうなるのか、そこに生きる生きものはどうなるのか、さらに人間にはどんな影響がでるのかということとを鋭く問いかけた警告の書です。

出版以来すでに60年もの時間が経過していますが、個々の指摘は現代にあわないこともあるでしょう。また、その後の科学的知見の積み重ねの中で、いまならこのように説明すべきだということもあるでしょう。

それでも自然の中に生きる生き物たちへの深い愛情、人間が行ってきたあまりにも乱暴な行いへの反省など、「いのちの言葉」で語られる『沈黙の春』のメッセージは、彼女の死後に出版された『センス・オブ・ワンダー』とともに、現代の環境問題を解決するための指針を示すものといえます。

『沈黙の春』の出版とその衝撃

『沈黙の春』の「まえがき」は、1958年の1月、ある友人が手紙を送ってきたということから書き出されます。

当時、アメリカでは、化学物質の大量生産、大量使用が行なわれていました。農薬・殺虫剤の使用も大規模化し、「害虫駆除」を目的にした農薬の空中散布もいたるところで行なわれていました。友人の手紙は、このような乱暴な行為をやめさせてほしいと訴えるものでした。

彼女は、自分にとっては専門外のことであり、相手にするのは農薬メーカーや化



ワシントン郊外・シルバースプリングのカーソンの家。ここで『沈黙の春』が執筆された。（写真左：レイチェル・カーソン日本協会提供）

学工業関係者であり、生半可なことで出来るものではない、それでも自分が書かねばならないと考え、『沈黙の春』の執筆を決意するのです。

この仕事は容易ならぬことでした。多くの専門家から情報提供を求め、丹念に資料にあたり、農薬・殺虫剤が自然の生態系、そこに生きる生き物たち、さらに人間の健康にどのような影響を及ぼすのかを克明に論証しなければなりませんでした。

執筆を決意してから4年間、徹底的な調査をすすめ、1962年の春先、原稿が完成します。原稿を書き上げたカーソンは、ベートーベンバイオリン協奏曲を聞きながら、「やるべきことはやった」との深い満足感をいだいたというエピソードが残されています。

1962年6月16日、雑誌『ユイコー』に『沈黙の春』が掲載されました。たちまち「サイレント・スプリング（沈黙の春）」が騒々しい夏になった」といわれるような反響がありました。「よくぞ書いてくれた」という賞賛の声もありましたが、予想通り、農薬メーカーや化学工業関係者から猛烈な攻撃がはじまったのです。口汚い個人攻撃もありました。

『沈黙の春』がよびおこした論争は、結局、ケネディ大統領の特別委員会が事実上カーソンの立場を認めたことにより決着し、やがて危険な

農薬・殺虫剤にたいする規制の方向がとられるようになったのです。

このような波紋が広がるなかで、彼女は、1964年4月14日、静かにこの世を去るのです。

『沈黙の春』が訴えたこと

『沈黙の春』が出版60年をむかえるにあたり、私は、みなさんといっしょにあらためてその意義を確認できれば、と思っています。

私は、これまで『沈黙の春』を読むための手がかりになればという思いで、『沈黙の春』が「4つの柱」で構成されているととらえることで理解しやすくなるのとてきました。

それは以下のような「4つの柱」です。

第1の柱 おそろべき力

人間は、核（原子力）と化学物質という「おそろべき力」を手にし、自然を征服しようとしたが、まるで人間自身が作り出した（悪魔）が手におえないいっつのものになってしまったようだ。

第2の柱 生命の連鎖が毒の連鎖にかわる

生態系に投入した農薬・殺虫剤は「食物連鎖」と「生物濃縮」によって、徐々に、そして確実にすべてのものを汚染の輪に包みこむと警告する。

第3の柱 さいごは人間！

「食物連鎖」の頂点に存在する人間もその例外ではなく、やがては汚染の輪に組み込まれ、健康障害に苦しむことになるのである。

第4の柱 べつの道へ

これまでの過ちに気づいたならば、これまでとはべつの道をとれと促すのである。それが生命と環境を守る唯一のチャンスだというのである。

『沈黙の春』は全部で17の章から構成されていますが、これらの「4つの柱」でくくってみると理解しやすくなるのではないのでしょうか。

今回、『沈黙の春』出版60年を前に、レイチェル・カーソン日本協会の仕



『13歳からのレイチェル・カーソン』

■監修：上遠 恵子
■編者：レイチェル・カーソン日本協会
■発行：かもがわ出版 ■仕様：A5版 本文182頁
■定価：1760円（税込み）

『沈黙の春』を読むための見取り図

『沈黙の春』の構成	主な内容・キーワード
三つの言葉	シュバイツァー、キーツ、ホワイト
まえがき	『沈黙の春』執筆の動機、協力者のリスト
1 明日のための寓話	「春がきたが、沈黙の春だった」
第1の柱 おそろべき力	
2 負担は耐えねばならぬ	人間自身がつくり出した悪魔＝〈核〉と化学物質
3 死の霊薬	殺虫剤の〈紳士録〉
第2の柱 生命の連鎖が毒の連鎖にかわる	
4 地表の水、地底の海	生物濃縮と食物連鎖、クリア湖のカイツブリの集団死
5 土壌の世界	バクテリア、菌類、そしてミミズ
6 みどりの地表	除草剤と野生生物生息地の変化
7 何のための大破壊？	自然の征服！？ マメコガネ防除の悲劇
8 そして、鳥は鳴かず	コマツグミの死と毒の〈生物学的増幅器〉
9 死の川	空中散布による魚介類の被害
10 空からの一斉爆撃	マイマイガ、ヒアリ防除のための空中散布
第3の柱 さいごは人間！	
11 ボルジア家の夢をこえて	身の回りの化学物質、食品の汚染
12 人間の代価	化学物質による人間の健康への影響
13 狭き窓より	細胞、染色体、過去と未来につながる遺伝子の汚染
14 四人にひとり	がんとのたたかい、〈発がん物質の海〉の中で
第4の柱 べつの道へ	
15 自然は逆襲する	自然の均衡力、自然そのもののコントロール力
16 迫り来る雪崩	昆虫の耐性、本格的な〈昆虫抵抗〉の時代
17 べつの道	化学的防除に代わる生物学的防除の可能性

事として『13歳からのレイチェル・カーソン』（かもがわ出版刊）を出版しました。私も『沈黙の春』の解説部分を担当しましたが、その際、『沈黙の春』を読むための「見取り図」を作りました。

もともと『沈黙の春』は「目次」をよくご覧になればおわかりかと思いますが、非常によく考えられた構成になっています。それを、「4つの柱」でくくってみることで、より総合的・立体的につかめるのではないかと考えたのです。

ここで『沈黙の春』の内容をくわしくお話しすることができませんので、みなさんが『沈黙の春』を手にし、その世界にふみこんでいただくことを願っています。その際、この「見取り図」がお役に立つならば幸いです。

語り継ぎたい
『沈黙の春』の論点

私は『沈黙の春』を語り継ぐ際、つぎのような論点を大事にしていきたいと思っています。

お気づきの方もいらっしゃるでしょうが、これらの論点は、「環境倫理」の主要な論点と相通するものです。「環境倫理」ということがまとまった形で論じられるようになるのは1970年代になつてからのことでしょうか、その原型が『沈黙の春』で示されていたというのは言い過ぎでしょうか。

〈「人間も自然の一部だ」という認識を〉

カーソンは「人間も自然の一部だ」と考えていました。このことは『沈黙

の春』のなかで何度もリフレインされています。人間が自然を「征服」しようとするのではなく、これまでの人間中心の考えや行動への反省をもとに、自然と「和解」し、「共生」していくことが必要だとしているのです。私は、「人間だけの世界ではない。動物も植物もいっしょに住んでいるのだ」というカーソンの思いを大事に語り継いでいきたいと思います。

〈「未来世代への責任」の自覚を〉

カーソンの思いのなかには「未来世代への責任」ということがあったといえます。

現代世代の私たちの行いが、未来の世代に対してどのような影響を及ぼすのか、それについてどのような責任を負わねばならないのか、という問いは、私たちが、現代の環境問題の解決のために念頭におくべき大事な視点なのだと思います。

私たちが「地球環境を守ろう」という場合、私たちにとつて住みよい地球環境を守るだけでなく、未来の世代にとつても等しく住みよい地球環境を守るための発言や行動をこれまで以上に大事にしなければならないと思います。

〈「閉ざされた生態系」という認識を〉

もうひとつ大事なことで強調したいのは、私たちが生きる生態系

は「閉ざされたもの」だということです。

1960年代に「宇宙船地球号」という議論がされました。地球は宇宙船のようなものだというイメージは「閉ざされた生態系」ということについてわかりやすく伝えるものだったといえます。この議論は、現在では、「持続可能な開発」をめぐる議論のなかで、「資源の枯渇」という問題とともに、「廃棄制約」という問題として議論されています。

私は、これからもこれらの論点を軸にレイチェル・カーソンと『沈黙の春』を語り継いでいきたいと思います。

「持続可能な社会」をめざして

気候変動問題をはじめ、私たちの未来は決して楽観できるものではありません。しかし、私たちが未来を選択することはできるし、そうしなければならぬのではないのでしょうか。

私たちは、まさに人類の未来を守るために、新たな文明の構築を視野に入れて、生産・消費・廃棄のあり方、私たちの暮らし・ライフスタイルのあり方を見直し、転換していくことが求められているのです。

その手がかりとなるのが、いま、国内外で注目されている「持続可能な

開発(Sustainable Development)」概念とSDGs(持続可能な開発目標)です。

「持続可能な開発」という概念は、1987年にまとめられた「環境と開発に関する世界委員会」報告書のキー概念として示されたものです。

報告書によれば、「持続的な開発とは、将来の世代の欲求を充たしつつ、現在の世代の欲求も満足させるような開発をいう」と定義がされています。

「将来の世代の欲求を充たしつつ、現在の世代の欲求も満足させる」という考え方は、将来の世代と現在の世代の間にある利害を調和させようとするものです。現代の環境問題では、この世代間利益の公平という問題はとても重要なテーマのひとつになっています。

『沈黙の春』からはじまった環境問題への取り組み

1962	『沈黙の春』出版
1970	アメリカでアースデー
1972	人間環境会議開催
1986	チェルノブイリ原発事故
1987	「環境と開発に関する世界委員会」報告書
1988	IPCC(気候変動に関する政府間パネル)設置
1992	リオデジャネイロで地球サミット
1997	地球温暖化防止京都会議、「京都議定書」採択
2001	残留性有機汚染物質(POPs)規制条約
2005	「京都議定書」発効
2011	東日本大震災、福島原発事故
2013	「水銀に関する水俣条約」
2015	国連、SDGs採択 パリ協定
2020	日本政府、「カーボンニュートラル」宣言
2021	グラスゴー気候合意

「持続可能な開発」という概念は、今日では2015年に国連が定めたSDGs(Sustainable Development Goals・持続可能な開発目標)として広く知られるようになりました。

SDGsは、発展途上国だけでなく先進国もふくめて2030年にむかつて国際社会が直面する課題を解決するための目標として、17の「ゴール」を示しているもので、いわば「持続可能な開発」という概念を「総論」から「各論」に具体化したものとして注目すべきものとされてきました。

SDGsは、採択から6年が経過し、SDGsとはどんなものかという紹介の段階から、SDGsの考え方や目標について、具体的に何から始め、どのように実践していくべきかという段階にきています。

SDGsの考え方は、多くの企業で、「環境経営」の取組みや「CSR(企業の社会的責任)」活動を発展させるための目標としてとらえられるようになっていきます。そして、今ではSDGsの考え方に対応できなければ市場での評価がえられないというのが常識になりつつあるようです。

消費者・市民のなかでも、「グリーン・コンシューマー(環境にやさしい行動がとれる消費者)」の活動を発展させるうえでSDGsの考え方がとりいれられています。

最近、「エシカル消費」(倫理的な

消費)ということが強調されますが、その場合でも、何が「エシカル」なのかを考える場合のめやすになっています。すなわち、消費者・市民の立場から、環境問題だけでなく、貧困や人権問題、ジェンダー問題、平和など、解決すべき社会的課題全般について考えながら、商品やサービスを選択しなければならぬという認識が広がっています。

SDGsの取組みをすすめるうえでは、SDGsの「17のゴール」とともに同時に示された「169のターゲット」まで目を配り、いつまでにどれだけのことを達成しなければならぬのかという「目標管理」型の取組みにすることが必要だと強調しておきたいと思っています。

「べつの道」へ

『沈黙の春』の最後の第17章の冒頭はあまりにも有名です。

「私たちは、いまや分れ道にいます。だが、ロバート・フロストの有名な詩とは違って、どちらの道を選ぶべきか、いまさら迷うまでもない。長いあいだ旅をしてきた道は、すばらしい高速道路で、すごいスピードに酔うこともできるが、私たちはだまされているのだ。その行きつく先は、禍いであり破滅だ。もう一つの道は、あまりへ人も行かないが、この分れ道を行くときにこそ、私たちの住んでいるこの地球

の安全を守る、最後の、唯一のチャンスがあるといえよう。」

カーソンは、このように問いかけたうえで、つぎのようにのべるのです。

「とにかく、どちらの道をとるか、きめなければならないのはわたしたちなのだ。長いあいだ我慢したあげく、とにかく(知る権利)が私たちにあることを認めさせ、人類が意味のないおそろべき危険にのりだしていることがわかったからには、一刻もぐずぐずすべきではない。……目を見開き、どういうべつの道があるのか、をさがさなければならない。」

彼女のメッセージを現代に、そして未来に向かって生かそうとするとき、この「べつの道」ということが、より幅のある、奥行きのある、とても重要な意味を持つていることに気づかれます。これまでとは違うやり方に転換しなければいけないというのは、それだけ、現在、私たちが深刻かつ困難な問題に直面しているということができるのです。このようなときだからこそ、私たちは未来のために「べつの道」を選択することが必要なのです。

私は、これまでから、カーソンを語り継ぐ活動は「未来へのバトン」だといってきました。かけがえのない地球を未来の世代に手渡すために、カーソンの生涯や業績を語り継ぎ、その思想に学び、私にできることを続けていきたいと思っています。

もっと知るために

レイチェル・カーソンの著作物

- 上遠恵子訳『潮風の下で』岩波現代文庫 2012
- 日下実男訳『われらをめぐる海』ハヤカワ文庫 1977
- 上遠恵子訳『海辺』平凡社ライブラリー 2000
- 青樹繁一訳『沈黙の春』新潮文庫 1974
- 上遠恵子訳『センス・オブ・ワンダー』新潮社 1996
- リンダ・リア編＝古草秀子訳『失われた森——レイチェル・カーソン遺稿集』集英社文庫 2009

レイチェル・カーソンの伝記等

- 太田哲男『レイチェル＝カーソン』清水書院 1997
- 上岡・上遠・原編『レイチェル・カーソン』ミネルヴァ書房 2007
- リンダ・リア著＝上遠恵子訳『レイチェル』東京書籍 2002
- ジンジャー・ワズワース著＝上遠恵子訳『レイチェル・カーソン』偕成社 1999